

研究ノート

第二次大戦終戦後にわが国で撮影された写真の 米国における所蔵状況調査

佐藤 洋一

本稿は、筆者が 2019 年 2 月現在行なっている米国での写真の所蔵状況調査に関する研究ノートである。筆者は都市史研究をアカデミックなバックグラウンドとし、第二次大戦終戦直後の日本の都市において、アメリカ人が撮影した写真を調査している。以下に述べるような問題意識の下に、約 3 カ月間で、13 カ所の機関を訪れ、82 のコレクションに触れてきた。この調査はより包括的に多くのコレクションを見ようとするもので、継続中である。

本稿では、調査の経緯を述べた上で、想定される調査対象を示した (1 章)。続いて調査に先立って写真そのものをどのように捉えるのかを整理した (2 章)。具体的には、写真記録としての意味 (2-1)、写真イメージの形成要因 (2-2)、写真イメージの読み方 (2-3) である。さらに調査の報告をするとともに (3 章)、今後紹介をすべきだと思われるコレクションから 3 つを選び、その概要を紹介した (4 章)。最後に、今回の調査から、終戦直後のアメリカ人による写真はどのようなものであるかを、視線の類型という観点から整理できる見通しを示した (5 章)。

本稿は今後、包括的であれ、個別的であれ、同様の調査を行う人々に有益な情報を整理して提供することを目的としている。同時にまた、本稿では、どのような写真があったのか、またどのような価値を有するのかを考える過程で、写真そのものをどのように扱い、どのように見ることができるのか、という写真の取り扱いに関する研究上の方法論にも触れている。したがって、写真史や美術史、メディア論やジャーナリズム論などの写真を専門とする分野ではない研究領域において、写真をどのように捉えればいいのか、ということ考えた一つの事例でもある。

1. 調査対象をどう捉えるか

いま写真史料から都市の歴史を構成すると仮定してみよう。その歴史が包括的であるた

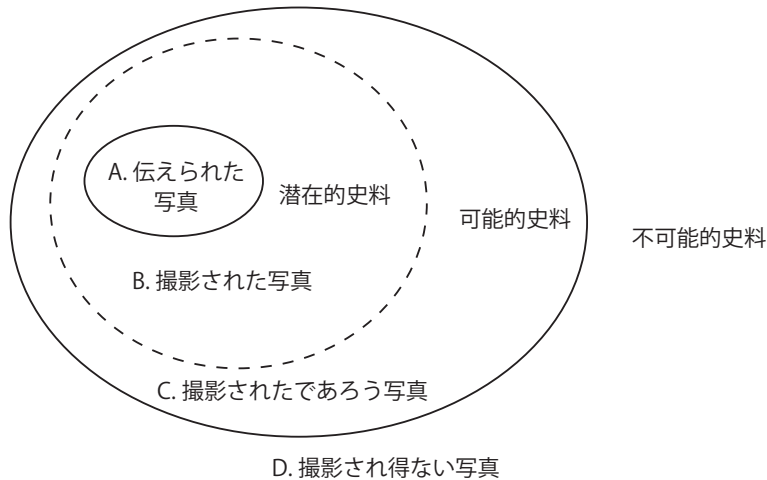


図1 研究対象となる写真史料の構成

めには、様々な人々によって撮られた全ての写真があったほうがよい。史料を収集し、整理するのに先立って、これから収集されるであろう未来の史料をどう指し示せばいいのだろうか（図1）。現時点で明確に史料として用いることができるのは、その存在を伝えられた写真のみである（図1のA）。実際に撮影され、現に存在している写真でも、未だその存在が伝えられていないものは潜在的な史料と呼べるだろう（同B）。またある事象や場所・風景など、おそらく撮影されたと思われるものは、その存在が未だ見出されていなくとも、どこかに存在している可能性がある。これをここでは可能的な史料と呼ぶ（同C）。そしてその場所や事象などが撮影されたものはないと断定されるものは、不可能的な史料と呼ぶことにする（同D）。CやDは仮想的な概念であるが、Cの可能的な史料とDの不可能的な史料との境界までが、写真史料として取り扱いうる範囲である。

1-1. 調査に至る経緯

我が国の終戦直後の状況はどのようなものだったのか。つまり戦前・戦中の何が消え、何が残り、新たに何が生まれたのか。その変化は、どのような環境のもとで起ったことなのか。こうした疑問には、明瞭に答えられない。その難しさは、敗戦前後で一貫したシステムで記録を残してこなかったこと、また我々自身がこの時代のことを語ることを避ける意識がどこかにあったこととも関連しており、事情は複雑である。したがって、この時期は、絡んだ糸をほぐすごとく、今後も末長く研究の対象となるだろう。その史料は可能な限り整理して利用を可能にする必要がある。

1) 初期の例としては、例えば、ジェターノ・フェーレイス『マッカーサーの見た焼跡—フェーレイス・カラー写真集』文藝春秋 1983 が挙げられる。その後も、ジョー・オダネル『トランクの中の

一方、戦後50年を経た1990年代半ば頃から、この時期を写した写真が、紹介される機会が断続的に続いている¹⁾。先の仮定にしたがえば、潜在的史料が顕在化したものである(BからAへ)。一つ一つのコレクションは断片的な記録だが、具体的である。空白期の具体的なイメージが写真として差し出され、我々が先行して持っていたおぼろげなイメージが刷新された。例えば、よく見知った場所の終戦直後の光景が写され、かつて何があったのか、何が起っていたのかを、写真を介して極めて明瞭に知るということを経験できる。それは古くて新しいイメージであった。

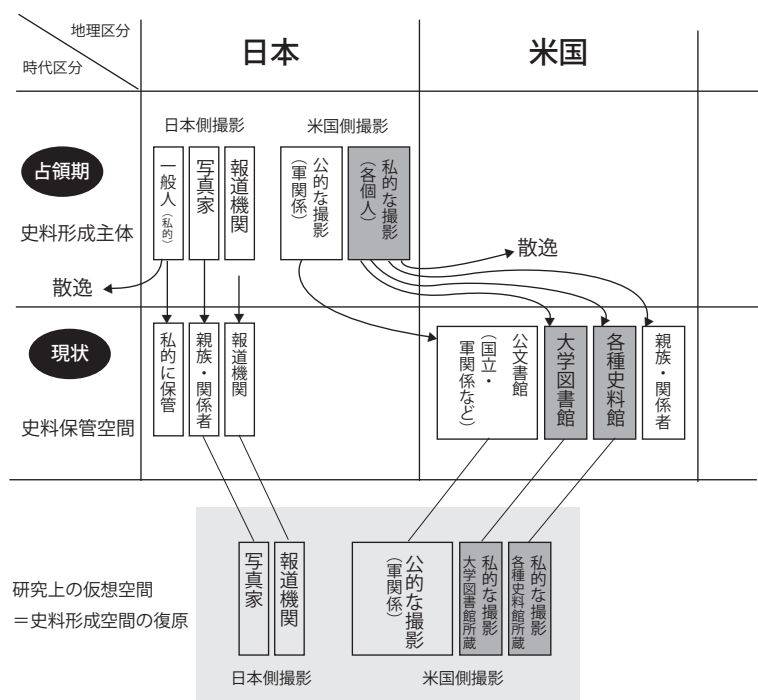
紹介された古くて新しいイメージのコレクションは、我々日本人が自ら記録したものではなかった。アメリカ人が撮影したものが、ある経緯のもと日本にもたらされたものだった。何もない場所に現れれば、少々乱暴な見せ方でも、そのイメージは価値あるものとして受け取られる。反面、コレクションが含んでいる意味や価値を正確に評価しにくかった。

どうやらその時代を記録した写真は、ないわけではない。これらの写真コレクションは、我々に「こんな写真もあるかもしれない」という可能的な史料への目を開かせた(Cの内容を想定すること)。どのような場所にどのようにあるのかについてヒントが示された訳である。その後筆者は情報を得て、米国立公文書館で写真を調査した。同館は所蔵量も世界屈指のアーカイブズで、主にアメリカの軍隊が撮影した写真も大量に公開されていた。筆者は終戦直後の日本、とりわけ東京の状況を、米軍が拠点として形作った接収地を中心として写真で把握するべく調査を行い、成果をまとめた²⁾。

本稿で述べる調査とは、その後の筆者の研究がブランクであった期間を経て、戦後すぐの写真資料は体系的に収集把握せねばならないのではないかという認識を改めて持ち、徐々に対象を拡大しながら、2014年から再開し継続中の調査のうち、2018年の9月から12月に行ったものを指している。日本から見た場合に潜在的な史料であったものを顕在化させて行くという趣旨の調査である(BをAに組み入れること)。もちろん全ての写真を見ることはできないが、アクセス可能な機関にある写真を見ることは難しくはないことを知った。様々なイメージを集め、コレクションごとの意味と価値を正確に評価しようとする、未知のイメージを通じて驚きを共有しつつ、先入観から解放され、この時代を正確に理解することへと向かう必要があると考えたためである。

日本』小学館 1995、『マッカーサーの日本 1945-1951 カール・マイダンス写真集』講談社 1995、『「につぼん 60 年前」カラーでよみがえる愛蔵版スティールコレクション』毎日新聞社 2005。この一年以内に出版されたものとしては、2018年に出版されたものとして、杉田米行・ディミトリ・ボリア（写真）『戦後日本の復興の記録』（上・下）大学教育出版 2018、J・ウォーリー・ヒギンズ『秘蔵カラー写真で味わう 60 年前の東京・日本』光文社 2018 などもある。

2) 佐藤洋一『米軍が見た東京 1945 秋』洋泉社 2016、同『図説 占領下の東京』河出書房新社 2006



研究対象となる写真史料の構成

図2 研究対象となった写真史料の移転と所在

1-2. 調査対象

筆者が仮想したのは、1945年を中心にした敗戦後の日本で撮影された写真のデータベースである。そこには、敗戦後に日本において撮影されたあらゆるイメージコレクションが含まれる。図1で示したカテゴリーでは、AからCまでの写真に相当し、これを母集団と想定することによって、各コレクションの記録的な意味や価値を明確化していくのである。そしてこのような包括的な調査は、可能的史料のありようを想像するための検討材料となるであろう。

データベースの対象となる写真コレクションは、日米両国双方に所在する（図2）。この時期は軍人軍属などの米国人が日本へ進駐し、彼らは公私にわたって写真の撮影をしているからである。彼らは帰国とともに写真を本国へ持ち帰った。その後、各地の大学図書館などに寄贈され、整理され、公開されているいくつかのコレクションがある。一方、日本人の多くは、一般的に見て、私的に写真撮影をする機会は多くはなかったし、私的なコレクションがあったとしても、多くの場合、なかなか社会の中に現れず、潜在的な調査対象のみである。

日米双方とも写真は、撮影者の属性により、いくつかの特徴的な類型へと整理しうる。大きく、公的な任務として撮影を行ったものと報道関係者による撮影、そして私的な撮影とに分けられる。本稿では公的な任務による写真をオフィシャル写真、報道関係者による写真をプレス写真、私的な撮影による写真をヴァナキュラー写真と呼ぶこととする。こうした撮影者による属性は撮影されたイメージのあり方と関係している。

今回の米国での調査は、主にヴァナキュラー写真を集めることである。ヴァナキュラー写真を調査するきっかけは2016年に知った米国人鳥類学者オリヴァー・L・オースティンにより撮影された写真である。そこには生き生きとした都市の姿が記録されていた。その後、2018年に開催された彼の写真の展示にも様々な形で関わることとなり³⁾、その会場でも来場者の確かな反応があった。筆者がこれまでに米国立公文書館等で調査していたオフィシャル写真によるイメージが伝えうるものとの違いを肌で感じた。

写真は都市の何を記録しうるのかという観点から写真をみると、個人が撮影したヴァナキュラー写真に可能性を感じるからである。撮られ得たであろう写真、すなわち可能的史料の幅が広いのである。しかしこれらは、オフィシャル写真やプレス写真と異なり、何かのきっかけがないと潜在的調査対象のままである。したがって、研究の意義を、より本質的な言葉で表すと、以下の3点に集約できるだろう。

①潜在的な調査対象を明らかにしていくこと

今回は米国での調査だが、日本国内やオーストラリアなど各地に、潜在的史料があるはずである。それらを探し当て、明らかにしていく。

②調査で見出したコレクションの意味や価値を理解すること

多くのコレクションを丁寧に見ることで、それぞれの意味や価値を明らかにする。

③コレクションの有益な活用が可能となるような紹介の仕方を考えること

コレクションやそれを集約したデータベースは、研究者の引き出しに眠ることなく、社会的存在となるべきである。そのため関係者を組織しながら、広く紹介して行く。これらを実施する上で、鍵となるのは、「写真をどう見るのか」という問いである。

2. 写真をどう見るのか

2-1. 写真記録としての3つの意味

筆者の視点から見て、写真が記録としてもつ意味とは、以下の3つである。

①写真が撮影された時点での時空間記録

3) 佐藤洋一「オースティンコレクションの特質について」(所収:『希望を追いかけて ~フロリダ州立大学所蔵写真展~』昭和館 2018) 参照。同展への情報提供および展示コンテンツ制作に協力した。

写真を、写真に写された時空間自体を記録対象として捉えるもの。時空間記録と呼ぶこととする。

②写真を撮影したという行為記録

写真は、撮影者による撮影行為の痕跡でもある。ここでは行為記録と呼ぶこととする。

③写真の扱われ方に関する経緯記録

撮影後、鑑賞されるまでに時間が経過し、また全く異なる場所でそれが鑑賞されうるには、その写真が保存・保管されたり、再編されたり、入手されたり、公開されたという相応の経緯がある。これを経緯記録と呼ぶ。

このうち時空間記録と行為記録は、どのような写真が撮影され得たのか、という現場の記録を示す。そしてまた行為記録を理解することは、可能的資料（図1のC）の存在、すなわち、どのような写真が撮られ得たのかを考える一助となる。また活用が可能な史料（図1のA）は、いずれもある種の経緯を経ているため、経緯記録にボタンを見いだすことができれば、潜在的史料（図1のB）を探り当てて一助にもなるだろう。

2-2. 写真イメージの形成要因

写真とは、直接的にはカメラという機械によって3次元空間を2次元的に撮像したものを指すが、カメラの操作には撮影者が必ず介在しており、主体的かつ選択的な要因が関わっている。ことに本稿で扱う1940-50年代においては、撮影の諸条件の設定を撮影者が行ったため、撮影者のあり方によって写真の質が左右される度合いも高い。

以下、やや煩雑だが、写真イメージの形成要因を一般化して整理を試みる。

- ①画角・焦点距離・被写界深度・シャッタースピード（露光時間）などのレンズ面の要因
- ②フレーミング、撮影メディア、フォーマットの媒体面の要因
- ③撮影者の地理的位置関係（緯度経度高度）のマクロなロケーション要因
- ④レンズの向きや周囲との位置関係などのミクロな撮影ベクトル場要因
- ⑤撮影者の撮影行為のモード要因

①レンズ面での要因

撮像されるイメージのうち、レンズにより規定される主要素が画角や焦点距離である。感覚的にいえば、画が広いのか狭いか、遠近感が強調されているか、あるいは遠近が詰まって見えるか、といった事柄である。またレンズはボディやフォーマットとの組み合わせで用いられるため、次項②で述べる内容とも関わっている。具体的には以下のような関わりがある。レンズの焦点距離が短いほど画角は広がるが、同じ焦点距離でも記録フォー

マットが大きくなれば、画角は広がる。従って二次元上の「見え」（＝遠近感）を同じくしたい場合は、画角だけが正しくてはそのようには見えず、焦点距離とフォーマットが一致していなければならない。

また被写界深度・シャッタースピードは撮影時に撮影者により設定されるもので、その選択によってピントの合い方（ボケ方）が左右される。これらは全て機械的に決定する要因だが、その選択は撮影者に委ねられている。

②媒体的要因

当時の写真撮影の媒体はフィルムである。フィルムには複数のフォーマットやサイズがあり、①のレンズとの組み合わせにより、どのように写真がフレーミングされうるかが決まる。フィルムフォーマットは画質（精細度）とも深く関わり、またカメラボディの大小は、撮影の機動性や撮影者の環境への対峙の仕方を規定する面がある。そのため媒体的要因は、⑤で後述する撮影モードとも深く関わる。またフィルムは種類によって感度が異なるため、これが撮影されやすい環境とされにくい環境とを分ける要因ともなる。さらにカラーフィルム（スライド）は色彩情報を含み、上映方式の鑑賞に向いていることなどから、これを選ぶ撮影者にも傾向がある。またカラーである効果を念頭に置いた撮影をしていたことも想像できる。

③マクロなロケーション要因

撮影者がどこにいたのか、という行動パターンに関わる要因である。居住地や勤務地、あるいはプライベートでの旅行などでの写真は行動地理学的な関わりから読み解くことも可能である。行動パターンは、むしろ社会的な属性とも関わりがある。ある属性の人々のみが入れる場所もあるし、決して訪れない場所もある。

④ミクロな撮影ベクトル場要因

撮影現場で、どこへ向けて、どのようにカメラを構え撮影したのかという点である。具体的には、立ち位置やカメラの向き、カメラの高さ（立っているのか座っているのかなど）、周辺の構築物や遮蔽物との関係などのミクロの調整である。撮影時のミクロな調整は、画面構成や見えがかり、視線の抜けなどに関わり、撮影イメージを大きく変えうる。

⑤撮影行為のモード

撮影行為のモードとは、撮影者が、撮影対象や撮影場にどのように関わりながら撮影したのか、ということである。誤解を恐れずにいえば、これは視線の質に関わる事柄である。例えば、同じ街並みを捉えた写真であっても、歩道を歩きながら撮影した写真と、車

道上で車に乗りながら撮影した写真とは街並みとの対峙の仕方が異なる。撮影のモードは、視線の質を規定する。それは対象との距離感や、画面の構築プロセスなどに関わるため、モードの違いは、そのままイメージのあり方を左右する。また移動に沿って連続的に撮影した写真や、俯瞰できる場所からパノラマ的に複数枚の写真を繋げるように撮影した写真は、撮影モードの違いとして理解ができるだろう。

2-3. イメージをどう読むのか

前項までに示した写真記録としての意味（2-1）や写真イメージの形成要因（2-2）は写真イメージを読むための前提であった。これらを踏まえ、写真はどのように見ることができるのか。

筆者の研究上の関心である都市史の視点から、写真から読み取りたいことは大きく以下の3つに集約できる。

- ①写っているものを読むこと
- ②撮影行為を読むこと
- ③なぜ撮ったのかを読むこと

これらは、同じ写真が持つ情報のレイヤーの違いだと考える。

①は写された空間や風景、事物そのものに焦点を合わせた見方をする。例えていうなら、写真を窓として、写真の向こう側の世界（撮影時の時空間）に入り込み、その世界の一部がフレーミングされたものとして写真を捉えている。

②は現場で撮影した行為の痕跡としての写真に焦点を合わせるもので、撮影者がどのようにイメージ形成を行おうとしたのかに関心を向ける。これは2-2で示した5つの要因、つまり、どのような行動をしつつ（撮影者の撮影行為のモード要因）、どのようなカメラを持って（レンズ面の要因、媒体面の要因）、どこに行き（マクロなロケーション要因）、その場でどのような撮影をしたのか（撮影ベクトル場要因）という撮影行為の記録として写真を見ることである。

③は撮影者の内面的な事柄に踏み込もうとするもので、読むというよりも想像することに近い。撮影者はなぜその写真を撮影したのか、という内面的な要因は、②の撮影行為などから推し量ることになる。しかしこれは写真からだけではわかり得ず、撮影者のバックグラウンドやその前後での活動などに関する史料と合わせて、推定する。

②と③のレイヤーは撮影者の行為や動機を理解しようとするもので、もし多くの事例を見ることができれば、戦後の日本において、アメリカ人が、どのような動機でどのような撮影をするのかについての理解も進むだろう。その蓄積は冒頭のCカテゴリーの可能的史料がどのようなものであり得るのかを考えるヒントになる。

また付け加えると、この3つの情報レイヤーが指し示すのは、①都市空間のあり方、②

都市における行為、③都市の人々の考えや記憶の一端である。

3. 調査報告

3-1. 調査の概要

①時期・訪問先・調査対象

調査は2018年9月から12月に実施した。訪問先は以下の14カ所である。2、4以外は大学の附属図書館または大学の付属機関である。事前にインターネットにて所蔵情報を検索し、閲覧をリクエストし、現地にて閲覧した。

1. University of Maryland (Hornbake Library)
2. National Archives at College Park
3. Lafayette College Library
4. MacArthur Memorial Archives and Library
5. Hoover Institution Archives (Stanford University)
6. Stanford University (Green library)
7. UC Berkeley (Bancroft Library)
8. UC Santa Barbara (Davidson Library)
9. UC Irvine (Langson Library)
10. UCLA (Charles E Young Research Library)
11. University of Southern California (East Asian Library)
12. Getty Research Institute
13. UC San Diego (Geisel Library)
14. Florida State University (The Institute on World War II and the Human Experience)

触れることができたコレクションは82であり、現地での複写撮影カット数は38,922カットであった(表1)。

②閲覧と複写

本調査が仮想する前提は、上述した通り1945年を中心にした敗戦後の日本で撮影された写真のデータベースの構築である。閲覧に際して、「見たいものだけを見る」あるいは「何が写っているかわかるものを見る」という態度では、集められるものに自ずと限界を作ってしまう。今回は対象としたコレクションを、時間の許す範囲で分け隔てなく全てを見るように心がけた。その上で、写真そのものを撮影する形で複写を行った。スキャナ持ち込みが可能な機関ではスキャンングを行った。

複写の基本的な考え方として、可能な限り多くの写真を複写すること、写真面のみなら

表 1 調査対象コレクション

No. コレクション名	撮影カット数	No. コレクション名	撮影カット数
カリフォルニア大学アーバイン校・ラングトン図書館 / UC Irvine (Langson Library)		スタンフォード大学・グリーン図書館 / Stanford University (Green library)	
44 York, Penniell photograph album	155	15 George Harmon Knoles papers	25
45 Tokyo and Bloody May Day Riots photograph album circa 1950-1953	199	16 Carl Mydans Photography Collection	62
46 Ruth Clark Lert Dance Library and Archive 1831-1994	30	59 Benton W. Decker Albums	913
カリフォルニア大学サンタバーバラ校・デヴィッドソン図書館 / UC Santa Barbara (Davidson Library)		フロリダ州立大学第二次世界大戦と人々の記憶に関する研究所 / Florida State University (The Institute on World War II and the Human Experience)	
23 Japan post World War II Photograph Album	258	63 Herbert J. Thurber, Jr. scrapbook, 1944-1945	295
24 Robert E. Kennedy Japan Photograph Album	210	64 Jean Crosby Olsen collection, 1937-2007	644
25 Occupied Japan Photograph Album	270	65 Stephen S. Winters Papers	246
26 Thomas K. Tindale Japanese Papermaking Photographs	133	66 Edward J. Stodole letters, documents, photographs and other material, 1942-1946	201
27 Japan (Tokyo) Photograph Album, ca. 1952-1953	334	68 Ronald Morgan papers, 1944-1946	83
28 Japan - Okinawa Photograph Album, 1952-1953	117	68 Oliver James Keller Papers, 1941-1946	86
31 U.S. Reparations Mission to Japan Presentation Photograph Album, ca. 1944-1946	213	69 Walter J. & Elaine E. Duggan photo collection	169
32 Japan photograph album, circa late 1940s-early 1950s	351	70 William I. Criste collection, 1886-2003	121
33 Royal Australian Air Force World War II Photograph Collection, ca. 1943-1946	440	71 Oliver Austin Jr. photo collection	271
34 Japan Photographs, ca. 1945-1947	32	72 Donald Benton Rock	117
35 Yokohama, Japan - U.S. Army photographs, 1948-1950	26	73 Linville E. Evans papers, 1940-1945	2
36 Alfred James Shepherd Papers, ca. 1939-1953	162	74 Edna Upham papers, 1942-1995	15
37 Max W. Isaacs Japan / Philippines collection, circa 1870s-1955 (bulk 1880-1919)	37	75 Paul K. Dougherty collection, 1942-2000	79
38 Post-World War II Japan photographs, circa late 1940s-early 1950s	48	国立公文書館 / National Archives at College Park	
39 Philippines / Japan / United States Photograph Album, ca. 1930s-1940s	209	2 Photographic Prints of Allied Prisoners of War	
40 Hiroshima Photograph Album, latter 1940s	128	82 RG554-CF Records of General Headquarters, Far East Command, Supreme Commander Allied Powers, and United Nations Command	162
41 Tokachi Offshore Earthquake photograph album, 1952		マッカーサー記念館 / MacArthur Memorial Archives and Library	
カリフォルニア大学サンディエゴ校・ガイゼル図書館 / UC San Diego (Geisel Library)		11 Collection of photographs (一部)	1277
52 Claude M. Adams Photographs	134	12 Vingoe Collection (RG-15 Materials Donated by the General Public)	486
カリフォルニア大学バークレー校・バンクロフト図書館 / UC Berkeley (Bancroft Library)		13 Velpy Collection (RG-15 Materials Donated by the General Public)	356
21 Archeson, George Photographs from the George Archeson papers	180	14 Papers of Ms. Carmen Johnson	215
22 Al Leong photographs of the United States Army in occupied Japan graphic	281	76 Dinitry Boria collection	2638
56 Ernest O. Lawrence personal papers, approximately 1904-1966	205	77 Papers of Laurence I. Hewes, Jr.	460
カリフォルニア大学ロスアンゼルス校・チャールズ・E・ヤング図書館 / UCLA (Charles E Young Research Library)		78 Papers of Brigadier General Elliott R. Thorpe	131
42 H. Arthur Steiner Papers, 1942-45	103	79 Papers of General Spencer B. Akln	116
43 Ted Gillen Photographs of postwar Japan and the Philippines, ca. 1945-1946	1835	80 Papers of Robert F. Malburg	66
48 Sidney L. Huff papers, 1918-1966	119	81 Papers of BGEN George A. Rehm	25
49 Theodore Cohen Papers, 1945-1980	16	メリラン大学・ブランクコレクション / University of Maryland (Hornbake Library)	
ゲッティ研究所図書館 / Getty Research Institute		1 Mead Smith Karras papers	3610
51 Bernard Rudofsky Papers, Getty	760	3 Robert P. Schuster Photographs	797
スタンフォード大学フーバー研究所図書館 / Hoover Institution Archives (Stanford University)		4 Mary Koehler Slides	80
17 Boris T. Pash papers	105	5 Lois Beno Photographs and Oral History	34
18 Kenneth Kantor papers	4320	6 Mark M. Biegel Photograph Album	100
19 Hubert Gregory Schenck papers	3650	7 Albert W. Hilberg ABCC Photographs and Reports	89
20 Robert B. Stinnett misc papers	1218	8 The Emerson Chapin Photographs and Slides	1188
29 Clovis E. Byers papers	208	10 Leora Smith Photographs and Oral History	47
53 Henri Harold Smith Hutton papers	68	ラファイエットカレッジ・図書館 / Lafayette College Library	
54 Ralph E. Jennings papers	202	9 Gerald & Rella Warner Japan Slides	794
55 G. William Gahagan	327	南カリフォルニア大学東アジア図書館 / University of Southern California (East Asian Library)	
57 Clarence Clemens Clendenen Papers	256	30 Hearst Corporation Los Angeles Examiner photographs, negatives and clippings	833
58 Robert Daniel Murphy papers	492	47 Shannon McCune Papers	1207
60 Stanislaw Mikolajczyk Papers	61	50 Shannon McCune Papers	1207
61 Charles Julian Wheeler papers	7		
62 Japanese modern history manuscript collection	28		
83 United States Army Forces, Pacific Psychological Warfare Branch issuance	458		

ず、裏面も可能な限り撮影することとした。またアルバムの場合は、各写真の他に、表紙およびアルバムのページ全体のカットも撮影した。

撮影条件は所蔵機関によって差があったが、可能な範囲で機材を持ち込み、条件を整えて撮影を行った。

3-2. 所蔵状況

①写真の位置付け

コレクション内での写真の位置付けは、

- ・写真のみで構成されるもの (photo collection, album)
- ・文書コレクションの一部として写真が含まれるもの (papers)

にわかれる。

個人が撮影した写真（ヴァナキュラー写真）のみで構成されるものと、オフィシャル写真やプレス写真も含まれるものもある⁴⁾。これは多くの場合は、軍の階位上は高級将校以上の場合が多く、任務上の必要からオフィシャル写真やプレス写真を入手したものだろうと推定される。また、絵葉書や他者が個人的に撮影したとわかる写真が含まれる場合も少なくない。ほとんどの場合、関係者からの寄贈資料であるが、撮影者が特定できないコレクションも一部にはある。これは個人的なアルバムなどの収集を目的として、古書店等から、大学図書館が購入したケースである。

②所蔵形態

整理・収蔵状況はまちまちであり、また所蔵機関のアーカイビングに対するポリシーによっても左右される。大きく、

- ・整理分類されたもの
- ・あまり整理されていないもの

がある。これは写真の経緯情報に属する事柄である。

前者に関しては、撮影者側ですでに整理されている場合（アルバム等に編集されているなど）と、収蔵機関側で整理分類（利用しやすさから分類を設定している）を施しているものもある。収蔵機関側による整理分類は、利用しやすさの面ではアドバンテージになるが、撮影者による秩序が失われることもあり、撮影者の行為や内面を理解する手がかりとなる情報が欠落してしまう。対照的に、後者では、ほぼ未整理の状態で写真が封筒に大量に入っていることもある。後に触れるが、それらにはピンボケや手ブレなど一般的には「失敗写真」だと考えられているものも含まれる。どのように写真が取り扱われてきたの

4) 佐藤洋一「極東軍司令部文書から見たオフィシャル写真の形成—1951–52年を対象として」(所収：『インテリジェンス』20、pp. 86–100、2020)

かという経緯情報がそこからは読み取れるのである。

③収蔵形態

写真が何に収められているかもまちまちであるが、

- ・アルバム（写真はコーナーで固定）
- ・ボックス
- ・スライドカラーセル
- ・スライドボックス
- ・封筒類
- ・ファイリング

など様々である。撮影者による原型をとどめているものも、所蔵者によってオリジナルから分けられ、再度整理され直されたものもある。オリジナルのアルバムのまま見ることができるものは、日本で購入したと思われるものも多く、写真の経緯情報を端的に物語る。またスライドカラーセルは、上映のためのスライドケースだが、収納されている順序で、上映されていたと思われるものである。

3-3. 写真フォーマット

コレクション自体にはフィルムを含むものと、プリントのみのものがあるが、前者はほぼ全ての場合 35mm フィルムのスライドであり、後者はモノクロ写真のプリントである（一部カラーのプリントもある）。以下、撮影メディアのフィルム種別である。カッコ内は撮影された画像のサイズである。

○フィルム

- ・35mm フィルム（2.4 × 3.6cm）、ハーフ 35mm（シネ）
- ・127 フィルム（4 × 6.5cm、4 × 4cm）
- ・120 フィルム（6 × 6cm）
- ・小名刺判（5.7 × 8.3cm）
- ・手札判（8 × 10.5cm）
- ・シートフィルム（4 × 5inch、5 × 7inch、8 × 10inch）

○プリント

- ・モノクロフィルムまたはガラス乾板から、モノクロプリントされたもの
- ・カラーズライド（Kodachrome、Ansco、Agfa）からプリントされたもの

前者が大多数であるが、カラーズライドからカラープリントされたと思われるものもあった。

4. 事例：コレクションの紹介

収集を進めながら写真を見てきたが、以下、個人撮影によるコレクションのうち、日本に知られていないが、今後紹介して行きたいものの中から、かいつまんで3つを紹介しておきたい。

(1) Kenneth Kantor papers (所蔵：Hoover Institution Archives)

Kenneth Kantor は放送作家として来日し、ラジオトーキョーに勤務する傍ら、ライターとして、米本国の雑誌に様々な記事を寄稿している。一方で、個人的なつながりから東京に所在する孤児院の支援や知人であった日本人医師と上野の地下道の浮浪者たちへ無料診療を行うなどの活動もしていた。

コレクションには、2,000 枚以上の写真が含まれるが、Kantor 自身が撮影したものだけでなく、上述した活動をともに行っていた日本人の知人や雑誌記事寄稿のために同行のカメラマンが撮影したと思われるものなども含まれている。Kantor のコレクションの面白さは、それらがあまり整理されていない状態、すなわち撮影者の秩序が感じられる状態で、閲覧ができることである。

活動歴からも分かる通り、Kantor はかなり日本人社会に近い場所で日常を過ごしていたことが写真からもうかがわれる。例えば街頭紙芝居の写真は多くのコレクションの中に見つけられるモチーフの一つだが、多くの場合、遠巻きに写真が撮られている。しかし Kantor の写真では、カメラは子供達の中にいる (写真 1)。また、彼が撮影したカットには、キャプションが入れられているものも多く、Kantor は目にしたものを比較的ストレートに撮っている (写真 2 と 3)。

(2) Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines, ca. 1945–1946 (所蔵：Special Collections, Charles E Young Research Library, UCLA)

Ted Gilien は太平洋戦線に従軍後、Combat Painter として 1945 年秋に東京に来日した。Gilien は翌年の帰国後、数十枚の油画を描いたと言われているが、その間に東京を中心に、広島や長崎などにも行き、街の風景や人物などをスナップショット的に撮影している。

コレクションは、以下のようなグループに分類されており、アルバムなどには貼られておらず、そのまま束の状態で閲覧に供されている。全体で約 900 枚である。

“Nagasaki” “Urakami” “Children” “USGI” “Philippines” “Girls” “Kabuki” “Planes and ships” “Imperial Place” “Clearing Rubbles” “Crowd” “Street Scene”

写真の主題は重なり合っており、分類は便宜的なものだと考えた方が良いでしょう。



写真1 Kenneth Kantor の写真から①

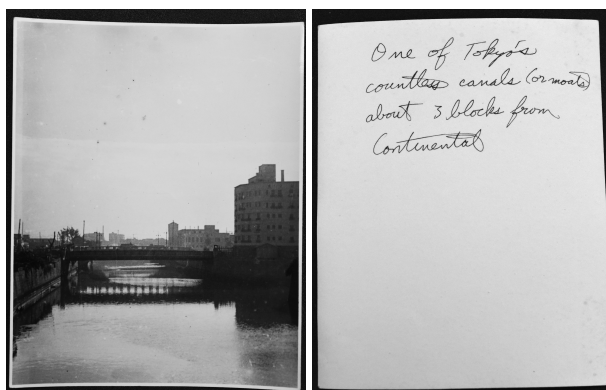


写真2と3 Kenneth Kantor の写真から② 右は裏面の記述

Gilien の写真のほとんどはキャンディッドフォト（相手に気づかれずに撮影する写真）であり、銀座や有楽町周辺の廃墟やバラック（写真4）をはじめ、同時期のこれまでに日本で紹介されている写真では見ることのできないイメージが含まれている。彼の写真は全てベスト判の4×4cmの写真であり、小型のカメラで町の中を縦横に動き回っていることがうかがわれる。また例えば廃墟の写真では、かつての建物の内側に入り、残骸に近寄って撮影したものなど、彼の撮影における行動がうかがわれる。残骸のディテールを捉えたカットも多く、おそらくは絵のモチーフのための記録として使われていた可能性も高い。これもこれまでに紹介されたものの中には類例のないイメージだと言えるだろう。

スミソニアン協会の Archives of American Art に、Gilien のオーラルヒストリー⁵⁾が残さ

5) “Oral history interview with Ted Gilien, 1965 Mar. 3” (Archives of American Art, Smithsonian Institution) URL: <https://www.aaa.si.edu/collections/interviews/oral-history-interview-ted-gilien-12806>



写真4 Ted Gilien の写真から (部分)



写真5 Mead Smith Karras の写真から

れており、太平洋戦線での体験や日本滞在時のことも語られている。写真を撮るにあたっての彼の内面的なこともうかがい知ることができるコレクションである。

(3) Mead Smith Karras papers (所蔵：Prange Collection in Hornbake Library, University of Maryland)

Mead Smith Karras は労働問題に関するアカデミックなバックグラウンドを持つ研究者である。女性軍属として来日し、戦後の労働行政、特に女性の社会参加を促進するよう、労働省の婦人少年局や地方の出先機関として各都道府県に設置されていた婦人少年局職員室を介して指導を行っていた。Karras は職務上、日本各地に出かけて婦人の労働に関する講演を行ったり、各地の工場などを訪れて、労働実態、労働環境についての視察も行っており、その折に撮影された写真がかなりの数にのぼる。

写真はほぼ全てアルバムに貼られている。しかし全くキャプションは書かれておらず、写真を解説するための時間を要する。東京での写真以上に、視察や講演で訪れた地方都市で撮影された写真が多い。また面白いのは、道中の列車内から撮られたと思われる写真も少なくないことである。東京の写真でも、特に枚数の多いのは皇居前広場で行われていたメーデーの写真で、メーデーの人の波の中に入りながら撮っている。

ストリートスナップでは、日本人の子供や女性たち（写真5）を捉えたものがとりわけ多く、婦人労働問題の専門家としての彼女の眼差しが向けられているようにも思える。

5. 今後の課題——視線の類型

米国での調査では、図1のBの領域を把握するために、多くの写真に触れることができた。この調査の過程に通底する問いとは、終戦直後のアメリカ人が撮った写真とはどのようなものであるかである。筆者の役割は、見つけた写真を日本で紹介することであるが、個別の面白い写真だけを紹介することではないだろう⁶⁾。面白い写真とは、皆が見たい写真だが、写真にできることは皆が見たいものを提示することではない。つまり、考えるべきは、個別の写真の集合から、いかにして共通性を見出し、それを構造的に伝えられるかということである。

とりあえず手がかりとなると思われるのは、2-3で示した3つの読み方、すなわち

- ①写っているものを読むこと
- ②撮影行為を読むこと
- ③なぜ撮ったのかを読むことである。

こうした視点から、データベースによる整理を進めている（図3）。

個人的に撮影をしていた複数の撮影者のヴァナキュラーな写真に共通する被写体の系統としては、大まかには、戦後処理に関する事物、都市的な景観や事物、都市空間における民俗的な事物、農村などでの土着的な事物、観光地での事物などに分けることができそうである。系統の中でさらに具体的な被写体を細かに検討して行くことも可能である。これまでにわが国では写真記録がなかった事物や風物が彼らの写真の中に見いだせることも珍しくない。撮影された事物の事典を作るように、写真に含まれる語彙を細かに捉えて行く作業は、誰にでも理解しやすい。だが際限がない作業でもあり、作業をある一定の範囲内に収めていく工夫も必要となる。

その一方、共通の事物や人物を撮影した写真を並べて比較し、撮影者それぞれの捉え方

6) 佐藤洋一「『ヴァナキュラー写真』と『ヴァナキュラーの写真』」（所収：『福祉社会へのアプローチ（上巻）』成文堂、pp. 661-680、2019）

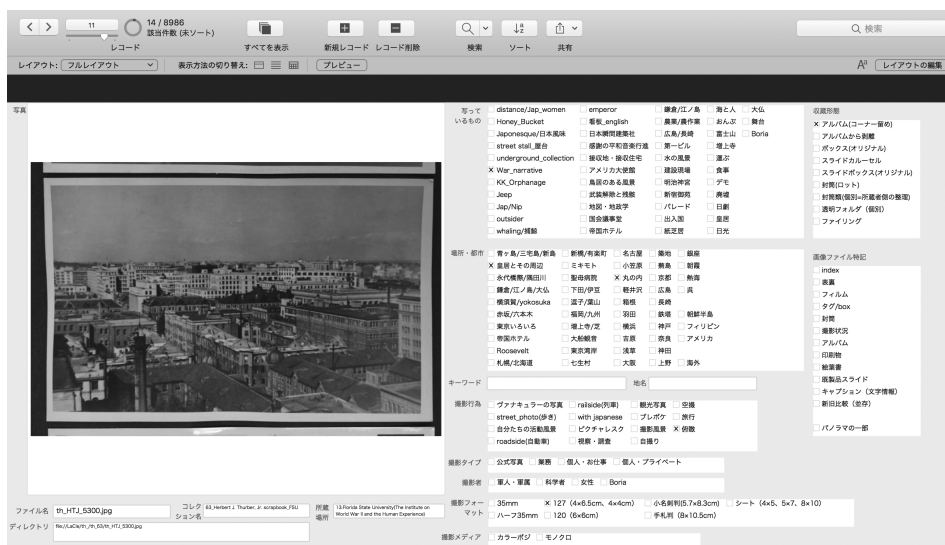


図3 整理中のデータベース画面

や共通する捉え方を細かに浮き彫りにすることもできる。そこに浮かび上がるのは、ある事物の写真に関わる空間性や関係性である。具体例を挙げると、鎌倉の大仏は実に様々なアメリカ人が撮影をしたものの一つであり、観光する中で撮影されているが、その撮り方、すなわちどの位置からどの方向でカメラを向けたのか、つまり写真記録に関わる空間性が見えてくる⁷⁾。また日本の子供たちも被写体として極めて頻繁に写真の中に現れるが、撮影者との距離や子供達の表情は様々で、被写体との関係性を見せてくれる。

さらに、2-1の②で示した通り、写真は行為の記録でもある。写真の集合は、終戦直後のアメリカ人たちはどこで何をしていたのかという大きな動きを明らかにする。と同時に、撮影の現場におけるミクロな動き、カメラの位置や移動の有無など、どのようなモード(2-2の⑤)で、眼差しを向けていたのかも読み取ることができる。ここからさらに「なぜ撮影をしたのか」という彼らの撮影を動機づけていたものに迫って行くことが、この調査の一応の最終課題である。

撮影行為における環境への向き合い方は、視線となって写真の中に記録される。視線の種類を、撮影者のモードと視線の空間性のみに絞って考えれば、以下がある。

〈俯瞰(パノラマ)〉

高い場所からの俯瞰写真で、数枚をつなぎ合わせるように撮影されたものも多い。俯瞰

7) 写真記録における空間情報の扱いについて触れたものとして、藤田秀之、有川正俊、岡村耕二「高精度な空間情報付き写真の3次元実空間マッピング」(所収:『電子情報通信学会論文誌 A:基礎・境界』87(1)、120-131、2004)を参照。

という視線の類型は、一般的には飛行機からの写真としてオフィシャル写真やプレス写真にも現れるが、自分の勤め先や住まいやその近くで撮られたであろう俯瞰写真も目にする機会が多い。

〈車道から〉〈歩道で〉

街路を行き交う人々の写真には、車からの撮影と歩道からの撮影とがあり、同様の被写体を撮影している。両者には人々との距離や関わり合いの違いから質の違う視線になっている。

〈列車から〉

長距離の移動で使われていた列車からの写真もまた特徴的であり、この視線はオフィシャル写真にはほとんどない。多くの場合、地方の田園地帯における写真、停車している駅での写真で、ブレたりボケたりしていることも多い。

〈観察〉

居住地や勤務地の周りを観察的に捉えるものである。一回性ではなく、繰り返し同じ場所や、同じ人々、同じ作業を観察している視線である。

〈ブレやボケ〉

当時の撮影はピントも露出もマニュアル合わせであり、かなり頻繁にブレたりボケたりしている写真がある。しかしこれは単純な失敗とは言えず、設定する前にシャッターチャンスが来た場合などで撮影されたものは、撮影者の視線を理解するためには大変有効なものでもある。

筆者のこれまでの閲覧の経験からの推測ではあるが、終戦直後において、日本人が写真を撮影する場面とは、冠婚葬祭や季節の行事などで、あくまでも「記念写真を撮る」ことであった。つまり視線の類型としては、あまり多くのバリエーションを望むことは難しいように思える。しかしながら、今回の調査で見えてきたアメリカ人による写真を振り返ると、写真イメージのパターンは多様である。したがって今後の課題は以下の通りである。

- ①アメリカ人たちの写真は、日本のどこまでを撮影しえたのであろうか。調査を継続し、この疑問についての答えを求めたい。
- ②同時に、アメリカ人たちの写真を構造的に紹介する方法を考え、それを実践したい。
- ③こうした作業を基礎として、この時期の写真史料に関する共有可能な研究基盤を作っていくことを目指す。

(本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(18K11999)の助成を受けた研究の成果の一部である。)